

殊に吾々が、代議制度の歴史、その起源、及び國家發達の度に従てその制度が變態を呈する有様等に就て一瞥を與へると、代議政治の時は既に去つたこと、その使命は終つたこと、そしてそれは新しい方式の政治組織に地を譲らねばならぬことが、了解される。

餘り遠くまで遡らないで、第十二世紀とコムミュンの解放とに就て見よう。

封建社會の中に一大自由主義運動が生じる。諸都市は諸侯から解放される。その住民等は相互的防護を『宣誓する』彼等は防壁内に獨立の組織を樹てる。彼等は生産、交換、商業、工業、の爲に組織される。彼等は、三四世紀の間、自由勞働に、藝術に、學問に、思想に、隠れ家を供するところの、今日吾々が稱讃する文明の基礎を据ゑるところの、諸都市を創定する。

コムミュンは、佛蘭西に於けるレヌアルやルバが主張し（ギゾオによつて、又一部分オーギュスタン・チエリによつて承述され）獨逸に於てアイヒホルンや、グロウプや、サヴニヤが主張したやうに、純粹に羅馬から發源したものでなく、輝ける『獨逸主義』學派が確認する如く純粹に獨逸的起源に基くのもなく、それは實に中世期の自然的所産であつた。商工業の中心たる町の常に重要性を増加する結果であつた。是れ羅馬の勢力の皆無であり、ジェルマンの勢力の殆ど認められない、伊太利に於て、フランドル諸地方に於て、ゴオル諸地方に於て、ジャーマニイに於て、スカンヂナヴィヤの世界に於て、スラヴ人の世界に於て、時を同じうして、即ち十一世紀と十二世紀にかけて、獨立諸都市が自ら解放された所以である。是等の諸都市は、それから三世紀の間、活氣ある生活を以て充され、更に後になりては近代國家の構成要素となつたのである。

自分達の防護の爲に武裝し、自分達の世俗的及び宗教的領主や王様に對して獨立の組織を内部に實行するブルジョアの切願たる、自由都市は、やがて彼等の壘壁内に開花した。そして彼等は領主に代つて周圍村落を支配しようとしたと言へ、また村落に自由の呼吸を吹き込んだ。村民達はやがて、農奴の解放に更に一步を進めて『吾等も彼等と同様に人間だ』（*Nus sumus homines cum il sunt*）と歌ふのであつた。

『勞働生活に開放された住家』たる自由都市は獨立勞働組合の聯盟として内部が組織された。各組合が自己の裁判と行政と義勇兵とを持つて居た。各團體が、その職業或は商業に關することのみならず、後

日に國家に歸せられた總ての方面の事務に就て主人公となつてゐた。即ち教育、衛生施設、習慣侵害、刑事及び民事事件、防護的軍備等に就て自ら主人公となつてゐた。工業的或は商業的であると同時に政治的な團體であつた諸々の同業組合はその會議所 (trading) によつて相互に團結した。民衆は重大な場合に鐘樓の鐘を合圖に集合して、或は組合間の異論を裁判し、或は市全體に關する諸事務を決定し、或は全住民の協力を要する共同の大企業に就て一致する爲に茲に會合するのであつた。

コムミュン内に於ては、殊にその初發に於ては、なほ些かも代議政治の痕跡を留めない。町や、區や全同業組合や、總括的全市は、自ら決定する——多數決を以てなく、そこに現はれた二つの意見の一方の人々が多數派の意見を完全に認諾するまで討議を進める。そして、それも試みとしてに過ぎぬであらう。

然らば一致聯合が果して存在したか？——その答は吾々が絶えず讚美するところの而も到底讃めすぎないところの彼等の勞作にある。凡そ中世期の終りの美しきものにして殘存するのは、悉く是等諸都市の勞作である。石の彫刻に於てコムミュンの氣分や歴史やを物語るところの巨大な堂塔、伽藍は、是等の同業組合が、藝術と自分等の都市との愛を以て、敬虔の心を以て働き (ランスやルアンの古刹の經費を支拂ひ得たのは夫等の都市の金庫を以てしたのではない) 彼等の市役所を美化すべく、彼等の壘壁を建立すべく、各都市が競争しあつて遂行したものである。

吾々に藝術の復興を與へたものは解放されたるコムミュンである。やがてハンサ同盟を誘ひ、また海

上の諸發見を導いた貿易の發達を吾々に與へたものは、商人の組合 (都市の住民全體がそれであることが多い) である——即ち都市住民は陸商や船舶の裝備に各自の分前を持つてゐたのである。今日吾々が利益を得てゐる産業技術の殆ど總てを創造して吾々に與へたものは、後日の企業家達の無知と利己主義によつて愚かにも貶される工業組合なのである。

*

併しながら中世期のコムミュンは減びなければならなかつた。内面の敵と外面の敵とが同時にこれを攻撃したのだ。

商業と戦争と田舎の利己的支配とは、コムミュンの中に不平等を増長し、一方から奪つて、他方を富ましむべく作爲した。暫らくの間、同業組合は市町村の内部にプロレタリアの發生することを防止したが、併し間もなく其組合は不對等の闘に於て倒れて了つた。掠奪によつて支持せられる商業や、同時代の歴史を充たす引續いての戦争は、一方を富まして他方を貧しくした。新生のブルジョアジイは、不和を溫醸し、財産の不平等を擴張すべく作爲した。都市は、富者と貧者とに『白』と『黒』とに分裂した。階級闘争は發現した。そして、その闘争と與に國家はコムミュンの内部に發生した。貧者が貧しくなり高利の爲に益々富者に隸屬するの度に從て、市政の代理、委任による政治、換言すれば富者の政治は、コムミュン内に發生した。その市政代理は、市有金庫と賞揚される傭兵と武裝した傭兵隊長と公役者と官吏とを備へた代表制國家を形成した。それ自ら國家であり、併し小さな國家である彼女は、やがて王

權の保護下に成立した大きな國家の餌食とならねばならなかつたのではないか？ 既に内部に侵蝕された彼女は、まことに外部の敵——王——の爲に併呑されて了つたのだ。

*

これ等の自由都市が榮えてゐる間に、集中的國家が既に彼等の傍らに成立してゐた。

それは町の騒音から遠方に、町の獨立を鼓吹する都市精神から遠方に生れた。新生の王權が確立したのは、巴里だの、モスコウだの——村落の群集たる——といふ新しい都會に於てである。その時まで王とは何者であつたか？ それは普通一般の徒黨の頭であつた。その權力は僅かに自らの山賊隊の上のみ行はれ、彼に和睦を乞ふ者達に些かの年貢を徴したところの頭であつた。自らの共同の自由に誇る都市内に閉ぢ籠つてゐる限り、この頭は何をなし得たか？ 彼がその城壁の單なる防禦から、その都市の主人たらうと欲するや否や、町は彼を放逐した。そこで彼は新生の集團内に、新都市内に逃避した。彼は、そこに於て、農奴の勞働から富を汲みとり、騷擾好きな平民の障礙に些かも遭遇しないで、金錢や、詐術や、陰謀や、武器を以て、徐々たる集積、集中の事業を初めた。そして、その事業は、當時の諸戦争や、繼續せる入寇によつて、歐洲の總ての國民に於て同時に餘りに助長せられた。

既に頽廢を始め、壘柵内に於て既に國家をなせる幾多のコミュニティは、彼の爲に照準點となり、モデルになつた。彼は唯だそれ等を徐々に包容すれば可かつた。諸機關を私有にし、それ等を王權の發達に使役すればよいのであつた。それが王者の仕方であつた。最初に於ては極めて遠慮深かつたが、漸く自

家の勢力の増長を感じるに従つて暴戾になつて來た。

コミュニティの特許狀に於て、書かれた法制が生れた。否寧ろ開拓された。それは國家の基礎たる役目をなした。それから後に羅馬法はそれに承認を與へ、それと同時に、その法制は王の權能に承認を與へた。羅馬古辭典から掘出された帝王權の理論は弘通せられて王家を利した。教會の方でも亦、好んでそれに自分の祝福を被らせた。そして自らの世界的帝國建設の計畫に失敗するや、何時か自分が地上を支配するの仲介となるべきものと聯盟した。

*

五世紀の間、王家はかうした徐々たる集成の事業を繼續し、先づ領主に對して農奴やコミュニティを嘯集し、後には自分の忠實な陪臣となれる領主の助けによつて農奴やコミュニティを壓潰した。王家は最初コミュニティに阿諛したが、その内部の争鬭の結果として彼の爲に門戸が開かれ、王家がちよろまかすであらう金庫と、王の傭兵を並列させるであらう城壁とを、王に引渡す時の來るのを待つてゐた。

捕獲品を與へられる程度にしか服従しない兵士等の頭たる王は、常に副將等の『顧問會議』に取巻かれてゐた。そして、それは十四世紀から十五世紀にかけて王の『顧問貴族會議』となつた。その後になつて『僧侶顧問會議』がこれに加はつた。かくて、王は、自らコミュニティを支配すべく成功するの程度に従つて、その宮廷に、『その善良な諸都市』の代表者等を招致し——殊に重大危機に際し——彼等に御用金を要求した。

かうして議會は生れたのだ。併し、よく注意すべきは、是等の代表的集團は、王家それ自身と同様に極めて制限されたる權勢をしか有さなかつた。彼等に要求されたことは、たゞ或る戰爭に對する經費上の助力だけであつた。そして其代表者等が一旦投票した助力さへ、尙ほ都市が批准することを必要とした。若し夫れ諸方のコミュニティの内部管理に至つては、王家は些かもこれに關與しなかつた。『某の都市は某の入寇を撃退する爲に貴下に某額の献金を承諾すべく用意してゐる。同都市は敵に對する要塞として備へる爲に一駐屯所を引受けることを應諾する』——これが當時の代表者の明瞭精確な委任であつた。今日、吾々が吾々の代議士に與へるところの、此世の一切を包含する無制限な委任に比して何といふ相違だ！

*

併し、失策は既に行はれた。富者と貧者との鬭争によつて肥つた王位は、國民防護の名を借りて成立した。

間もなく衆議院の代表者等は、王宮に於て彼等の献金の浪費されるのを見て、それを規則だてようと考へた。彼等は自ら國庫の管理者たることを王家に強要した。そして英國に於ては、彼等は貴族等の支持によつて、さうすることを承諾さるべく成功した。佛蘭西に於ては、ボアチエの事變の後、彼等は當に同一權利を僭有しようとしてゐた。併しながら、^{エドモン・マルセル}Edmond Marcel の指導で蜂起した巴里は、農民一揆と同時に沈黙に歸した。そして王家は新たな威力を得てその鬭争から逸出した。

その時から、總ては、王位の確立に寄與し、王の掌中に諸權力を集中した。献金は租税と化し、ブルジョアジイはその秩序及び管理の精神を以て王に奉仕することに専心する。コミュニティは頽廢して順次に王の前に倒潰する。弱い農民等は段々に農奴狀態に——人格的でなければ經濟的に——零落する。羅馬法の理論は法律家によつて發見される。繼續せる戰爭は強權の常住的源泉となる。かうして總ては王權の確立を助成する。コミュニティ組織の相續者たる王は、その組織を掌握して段々に人民の生活内に干渉の手を延ばした——そしてルイ十四世に及んでは『朕は國家なり！』と叫び得るほどになつた。

其時から以後、王權は頽廢し、惡化して、寵臣等の手中に歸し、ルイ十六世治下に於ては其初期の自由主義施設を以て回復を計つたが、やがて、その惡事の報いにて倒れて了つた。

*

かの大革命は、王權上に斧鉞を加へる時、何をなせしか？

この革命を可能ならしめたところのものは、それは四年間全然無能力になり、單に既成事實の自記機械と化したる、中央政權の崩潰といふことである。そして、それは、權力者から總ての權限を奪ひ、それに對して納税と服従とを拒否したる、都市と田舎との自發的行動である。

だが、優位を占めて居たブルジョアジイは、果してかうした事態に應合し得たか？ブルジョア階級は、人民が、諸侯の特權を禁止した後、都市及び村落のブルジョアの特權を攻撃するに至るべきを見た。そこで彼等は人民に打勝たうとして、それに成功した。それが爲に、ブルジョア階級は、代議政治

の宣傳者となり、その思想を國民に訴へる爲に、自分に認められた組織と行動の全力を盡して四年間働いた。其理想はエチエンヌ・マルセルのそれであつた。即ち、理論に於ては、絶對的權能を授けられ、實際に於ては、明白にブルジョア階級の代表者を以て構成された議會の爲にゼロにまで零落した、王であつた。王位といふ空名の下に於けるブルジョアジイの議會による最優權、これがその目的であつた。假令人民が共和制を強要して、ブルジョアジイがそれを受諾するとしても、それは不本意ながらのことだ。従つて出来るだけ速かに其制度から免れようとするのだ。

このジャコバンの理想こそ今日に至るまで尙ほ歐洲各國のブルジョアジイの理想であり、そして代議政治はその武器である。

經濟的、社會的の一切の事務の支配を代議政府に信託することを希望し得るか？ 王家とブルジョアジイとの苟合であつたところのものが、社會主義的勞働者の理想であらねばならぬか？

新しい政治的時相は、新しい經濟的時相に應合する。社會主義者によつて希望されるやうな深遠な革命は、過去の政治的生活の鑄型中に入ることはできないであらう。環境の平等、勞働手段の綜合的所持、を基礎とする新社會は、一週間といへども代議制度に適應することは出來まい。またこの死屍に電氣をかけようとする如何なる修正案にも應合することは出來まい。

それのみならず、この方式は前から指示されてゐる。それは單一から綜合へと形成することである。社會内の個人の數多き一切の需要を滿すべく自由にて構成されるところの集團を創定することである。

のが出来る。それは益々擴張されて、既に總ゆる部分の人間活動に普及し始める。科學、藝術、工業、商業、救済から、郷土の防護、泥棒や裁判官やに對する保險等に至るまで、彼等に見のがされるものは何もない。彼等の準備は擴大せられ、遂には、王や議會が曾て僭有したところの總てを包含するに至るであらう。

將來は利害關係者の自由集團のものであつて、政府的集中主義のものではない——自由のものであつて強權のものではない。

併しながら自由集團から生起するところの組織を素描する前に、吾々は尙ほ、今日まで吾々にすつかり滲みこんでゐる政治的偏見を攻撃せねばならぬ。そして、それは、吾々がこれから研究しようとするところである。

昭和六年 六月二十日 印 刷
昭和六年 六月二十三日 再版發行

【價 十 錢】

著作、發行
兼印刷人

東京府下千歲村八幡山

石 川 三 四 郎

印 刷 所

東京市牛込區納戸町十三

共生舎印刷所

發行所

東京府下千歲村八幡山

共 學 社

振替東京七四九九番